

今回のかやぶんかわら版では、63号・64号に引き続き、北杜市内の民俗行事についてご報告します。今回は、「白州町下教来石の獅子舞と道祖神祭り」です。（内海）

獅子舞

北杜市白州町の^{しもきょうらいし}下教来石では、小正月（かつては1月14日。現在は成人の日）に獅子舞と道祖神祭りが行われます。獅子舞は、下教来石各戸（約100戸）で2つずつ舞を舞うため、長時間かかります。下教来石獅子舞道祖神祭り保存会の集合時間は午前3時半。午前3時から地区中を回る起こし太鼓の音を合図に、暗い中、保存会の皆さんが公民館に集まってきます。公民館で式典をし、午前4時には獅子舞が出発します。最初に諏訪神社に行き、神社と道祖神社で舞を奉納します。その後、^{らいふくじ}来福寺、地区の^{しも}下（南端）の橋にて舞を舞います（写真1）。昔、下教来石の獅子舞には^{らふじ}牡獅子と^{めじし}牝獅子があり、祭りでは、地区の^{かみ}上から牝獅子が、下から牡獅子が舞を舞っていき、双方が出会った所で舞い納めをしていたといいますが、^{えきびょう}疫病が流行した際、上の^{かみきょうらいし}境（上教来石地区との境）に牝獅子を、下の^{とりはら}境（鳥原地区との境）に牡獅子を置いて、疫病の侵入を防いだそうですが、^{ぼら}沢が氾濫して牡獅子は流出してしまい、それ以後は牝獅子のみで舞うようになったそうです。そのため、現在、下教来石に伝わる獅子舞は牝獅子です。舞には、本舞である「幕の内」（写真2）と、^{まじし}悪魔祓いの「^{けん}剣の舞」（写真3）があります。獅子は、和服に黒足袋を身に付け、水玉模様^{みづたま}に亀を染め抜いた幕のついた獅子頭を頂きます。「幕の内」では幕を広げて舞い、「剣の舞」では右手に三尺の^{けん}剣・左手に古銭の鈴を持って舞います（写真4）。保存会の会員は「松」と「竹」のグループに分かれていて、家々を回る際は交互に担当し、交替で休憩をとります。午後4時半頃に家々で舞う獅子舞が終わり、最後に地区の上（北端）の橋・諏訪神社・道祖神社にて舞を奉納して、今年度の獅子舞奉納が終了しました。



写真1



写真2



写真3



写真4



写真1



写真2



写真3



写真4

道祖神祭り

獅子舞終了後、保存会会員は一旦解散して、着物姿から、道祖神祭り用の動きやすい服装に替え、公民館に再集合します。その後、神社に集合し、午後7時より道祖神祭りの式典が始まりました。式典後、保存会会員から選ばれた^{とうどり}頭取・^{ふくとうどり}副頭取の内4名が、神主さんより道祖神のご神体を受け取ります。頭取達は道祖神社の前に^た焚かれた火の上を走り、境内を駆け抜け（写真1）、境内を出た所で、他の頭取・副頭取・保存会会員達に囲まれます。そして、全員が身を寄せ、押し合いながら進む「お練り」が始まります（写真2）。その中から、一組の頭取・副頭取が本物の^{しんたい}ご神体を持って抜け出し、区の役員及び結婚や出産などの慶事があつた家々を回ります。家々では、頭取が神棚にご神体を置き、お祈りをし、その後、ご神体にお神酒を捧げて、最後に家族全員がご神体で頭を撫でてもらいます。頭取達は土足で家へ上がり、家から家は全速力で駆け抜けます。最後の家が終わり、ご神体を持つ頭取・副頭取の組とお練りが合流し、午後8時半頃、道祖神社に戻ってきます。鳥居の下で頭取・副頭取の内4名がご神体を捧げ持ち、その下を地区の人々が通って境内に入っていきます（写真3）。出て行く時と同様、頭取達は焚かれた火の上を走り、神主さんにご神体を戻し、その後、神主さんはご神体で地区の人の頭を撫でていきます（写真4）。最後に道祖神社にて式典を行い、道祖神祭りが終了します。

獅子舞も道祖神祭りも、周辺では類を見ない規模の大きなものでした。保存会の皆さんをはじめとした、地区の皆さんの祭りに対する熱い想いと、本行事が地区にきちんと根付いているということ、強く感じる行事でした。